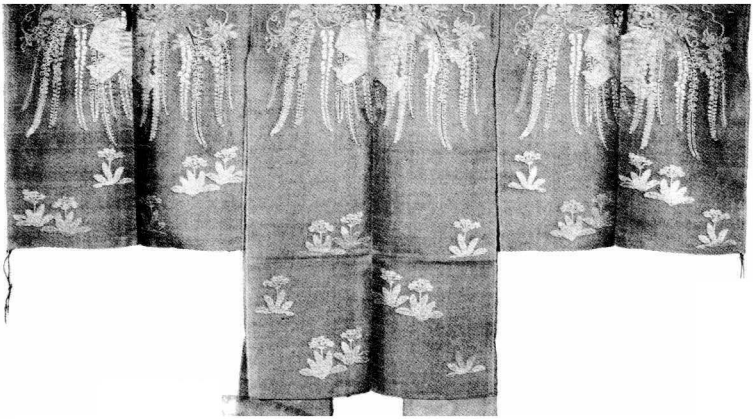
珠玉百歌仙

塚本邦雄



毎日新聞社

珠玉百歌仙（しゅぎよくひやくかせん）　定價　三〇〇〇圓

昭和五十四年六月二十日　印刷
昭和五十四年六月三十日　發行

著　者　塚本邦雄（つかもとくにを）
裝幀者　政田岑生
編輯人　吉田掟二
發行人　高原富保
發行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田區一ツ橋
〒五三〇　大阪市北區堂島
〒八〇二　北九州市小倉北區紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村區名驛

印刷　精興社
製本　大口製本

© KUNIO TSUKAMOTO Printed in Japan 1979

珠玉百歌仙

目次

序　砂中の金・雨夜の星　一

① 射ゆ獣を認ぐ川邊の若草の若くありきと吾が思はなくに　齊明天皇　一八
② 家にありし櫃に鏁刺し藏めてし戀の奴のつかみかかりて　穗積皇子　二〇
③ 蜻蛉羽の袖振る妹を玉くしげ奥に思ふを見たまへ吾が君　湯原王　二三
④ 雄神河紅にほふ嬢子らし葦付採ると瀬に立たすらし　大伴家持　二四
⑤ 道に逢ひて咲ましからに零る雪の消なば消ぬがに戀ふとふ吾妹　聖武天皇　二六
⑥ ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ戀もするかな　讀人知らず　二八
⑦ 名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　在原業平　三〇
⑧ 蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香濃くも匂ひぬるかな　紀友則　三三
⑨ かぎりなき思ひのままに夜も來む夢路をさへに人はとがめじ　小野小町　三四
⑩ 夕ぐれは雲のはたてにものぞおもふあまつそらなる人を戀ふとて　讀人知らず　三六
⑪ 天の原あかねさし出づる光にはいづれの沼か冱え殘るべき　菅原道眞　三八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

⑫ 影見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき　紀貫之　四〇

⑬ さくらばな匂ふともなく春くればなどかなげきの茂りのみする　伊勢　四二

⑭ 風吹けば嶺に別るる白雲の絶えてつれなききみが心か　壬生忠岑　四四

⑮ 逢ふことは遠山鳥のかりごろも著てはかひなき音をのみぞ泣く　元良親王　四六

⑯ うつつには更にも言はじ櫻花夢にも散ると見えば憂からむ　凡河内躬恒　四八

⑰ 秋風になびく淺茅のすゑごとにおく白露のあはれ世の中　蟬丸　五〇

⑱ 曇り日の影としなれるわれなれば目にこそ見えね身をばはなれず　下野雄宗　五二

⑲ いとかくてやみぬるよりはいなづまの光の間にも君を見てしが　大輔　五四

⑳ 瑠璃草の葉におく露の玉をさへもの思ふきみは涙とぞ見る　源順　五六

㉑ よひよひの夢のたましひ足高く歩かで待たむとぶらひに來よ　小大君　五八

㉒ 琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけむ　齋宮女御徽子　六〇

㉓ 君戀ふる心の空は天の川かひなくて行く月日なりけり　平兼盛　六二

㉔ 夕暮の木繁き庭をながめつつ木の葉とともに落つる涙か　藤原義孝　六四

㉕ 蟬の羽の薄らごろもとなりにしを妹と寢る夜の間遠なるかな　曾根好忠　六六

㉖ さよふけて風や吹くらむ梅の花匂ふここちの空にするかな　藤原道信　六八
㉗ 夢にだに見であかしつるあかつきの戀こそ戀のかぎりなりけれ　和泉式部　七〇
㉘ 澄める池の底まで照らすかがり火のまばゆきまでも憂きわが身かな　紫式部　七二
㉙ さくら花春は夜だになかりせば夢にものは思はざらまし　能因　七四
㉚ おくりてはかへれと思ひし魂のゆきさすらひて今朝はなきかな　出羽辨　七六
㉛ いつとなく心そらなるわが戀や富士のたかねにかかる白雲　相模　七八
㉜ 風吹けば蓮の浮葉に玉こえてすずしくなりぬひぐらしの聲　源俊頼　八〇
㉝ 笹の葉を夕露ながら折り敷けば玉散る旅の草枕かな　待賢門院安藝　八二
㉞ みちのくの金をば戀ひてほる間なく妹がなまりの忘られぬ哉　源頼政　八四
㉟ 荒れわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露の夕暮　藤原俊成　八六
㊱ 松風の音のみなにか石ばしる水にも秋はありけるものを　西行　八八
㊲ 夢とのみ思ひ果ててもやむべきに契りし文の何殘りけむ　小侍從　九〇
㊳ 教へおく形見をふかくしのばなむ身は青海の波に流れぬ　藤原師長　九二
㊴ 雲路わけてもの思ふ雁や過ぎつらむ色淺からぬ萩の上の露　鴨長明　九四

㊵ 桐の葉も踏みわけがたくなりにけりかならず人を待つとなけれど　式子内親王　九六

㊶ 雲とづる宿の軒ばの夕ながめ戀よりあまる雨の音かは　慈圓　九八

㊷ 唐土も近く見し夜の夢絶えてむなしき牀に沖つ白波　藤原家隆　一〇〇

㊸ 鶉鳴くゆふべの空をなごりにて野となりにけり深草の里　藤原定家　一〇二

㊹ 片山の垣根の日かげほの見えて露にぞうつる花の夕顔　藤原良經　一〇四

㊺ 見し人の面影とめよ清見潟袖に關守る波のかよひ路　藤原雅經　一〇六

㊻ 暮れはつる尾花がもとのおもひ草はかなの野べの露のよすがや　俊成卿女　一〇八

㊼ 白菊に人の心ぞ知られけるうつろひにけり霜もおきあへず　後鳥羽院　一一〇

㊽ 風吹けばよそになるみのかたおもひ思はぬ波に鳴く千鳥かな　藤原秀能　一一二

㊾ 見渡せば冰の上に月冱えて霰なみよる眞野の浦風　後鳥羽院宮内卿　一一四

㊿ くれなゐの千入のまふり山の端に日の入る時の空にぞありける　源實朝　一一六

(51) 草の葉におきそめしより白露の袖のほかなる夕暮ぞなき　順德院　一一八

(52) 落ちたぎつ岩瀨を越ゆる三河の枕をあらふあかつきの夢　藤原爲家　一二〇

(53) たれかきく飛火がくれに妻こめて草踏みちらすさを鹿の聲　藤原光俊　一二二

54 花の色も月の光もおぼろにて里は梅津の春のあけぼの　他阿　一二四
55 わが戀は狩場の雉子の草がくれあらはれて鳴く時もなければ　佛國國師　一二六
56 忘れずよそのかみ山の山藍の袖にみだれしあけぼのの雪　飛鳥井雅有　一二八
57 夜はの月見ざらましかば絶えはてしその面影もまたはあらじを　龜山院　一三〇
58 うなゐ兒が野飼の牛に吹く笛のこころすごきは夕暮の空　西園寺實兼　一三二
59 花よただまだうす曇る空の色に梢かをれる雪の朝明　藤原爲子　一三四
60 たなばたも堇つみてや天の河秋よりほかに一夜寢ぬらむ　冷泉爲相　一三六
61 星清き夜はのうす雪空晴れて吹きとほす風をこずゑにぞ聞く　伏見院　一三八
62 月影は森の梢にかたぶきてうす雪しろし有明の庭　永福門院　一四〇
63 明けぬれば色ぞわかるる山の端の雲と花とのきぬぎぬの空　惟宗光吉　一四二
64 葛はうらみ尾花は招く夕暮をこころつよくも過ぐる秋かな　夢窓國師　一四四
65 明くる夜の尾の上に色のあらはれて霞にあまる花の横雲　慈道親王　一四六
66 しるべせよ田上川の網代守ひを經てわが身よる方もなし　吉田兼好　一四八
67 吹く風に散りかひくもる冬の夜の月のかつらの花のしらゆき　後二條院　一五〇

68 憂しや憂し花匂ふ枝に風かよひ散り來て人のことひはせず　頓阿　一五二
69 鳴神の音を殘して一むらの雲は過ぎぬるゆふだちの空　公順　一五四
70 知られじな入相の鐘の聲のうちに忘られぬ身のよその夕暮　二條爲定　一五六
71 暮れもあへず今さしのぼる山の端の月のこなたの松の一本　花園院　一五八
72 かたしきの十符の菅薦さえわびて霜こそむすべ夢はむすばず　宗良親王　一六〇
73 うつりにほふ雪の梢の朝日影今こそ花の春はおぼゆれ　光嚴院　一六二
74 いづかたにしをれまさると有明に袖の別れの露をとはばや　後崇光院　一六四
75 樗咲く雲の一むら消えしより紫野行く風ぞ色濃き　清巖正徹　一六六
76 宿は荒れぬうはの空にて影絕えし月のみ殘る夕顏の露　心敬　一六八
77 うちいづる中の思ひか石ばしる瀧つ波間にしげき螢は　飛鳥井雅親　一七〇
78 今朝よりは袂も薄くたちかへて花の香遠き夏ごろもかな　後花園天皇　一七二
79 暑き日の影よわる山に蟬ぞ鳴くこころの秋ややがて苦しき　飯尾宗祇　一七四
80 啼き連れて聲より聲もますらをの心にかへる夜半のかりがね　太田道灌　一七六
81 咲く百合の花かあらぬか草の末にすがる螢のともし火のかげ　後土御門院　一七八

82 やどり來し野原の小萩露おきてうつろひゆかむ花の心よ　牡丹花肖柏　一八〇
83 知らざりきはなだの帶のすゑつひにからき思ひに移る心は　後柏原院　一八二
84 夕顏の露の契りや小車のとこなつかしき形見なりけむ　足利義尙　一八四
85 誰か知るはじめも果ても吹きむすぶ月と風との秋の契りを　木下長嘯子　一八六
86 小山田に冬の夕日のさし柳枯れてみじかき影ぞ殘れる　下河邊長流　一八八
87 しなのなる菅の荒野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな　賀茂眞淵　一九〇
88 降る雪に競ひ狩する狩人の熊のむかばき眞白になりぬ　田安宗武　一九二
89 天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり　楫取魚彥　一九四
90 月ひとり天にかかりてあらがねの土もとほれと照る光かな　小澤蘆庵　一九六
91 峯こえて思へば長き春日かな麓の花のけさの面影　本居宣長　一九八
92 ねざむれば比良の高嶺に月落ちて殘る夜暗し志賀の海面　上田秋成　二〇〇
93 夕あらし雪の花をも負ひそへてかへる木樵りの歌ふ聲聲　後櫻町天皇　二〇二
94 ゆく秋のあはれを誰に語らまし藜籠に入れて歸る夕ぐれ　良寬　二〇四
95 白樫の瑞枝動かす朝風にきのふの春の夢はさめにき　香川景樹　二〇六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

96 ゆたけしな若菜の色も青馬の節にあふぎをかざすたをやめ　光格天皇　二〇八
97 柴の戸に落ちとまりたる樫の實のひとりもの思ふ年の暮かな　大田垣蓮月　二一〇
98 風吹けば空なる星もともしびの動くがごとくひかる夜半かな　大隈言道　二一二
99 大比叡の峰に夕ゐる白雲のさびしき秋となりにけるかな　八田知紀　二一四
100 岡越えの切通したる作り道卯の花咲けり右に左に　井上文雄　二一六
101 妹が家の向ひの山は眞木の葉の若葉涼しく生ひ出でにけり　平賀元義　二一八
102 川の瀬に洗ふ蕪の流れ葉を追ひ爭ひてゆくあひるかな　野村望東尼　二二〇
103 山賤がけぶりふきけむ跡ならし椿の卷葉霜に冰れり　加納諸平　二二二
104 夕顔の花しらじらと咲きめぐる賤が伏屋に馬洗ひ居り　橘曙覽　二二四
105 秋ふけて破れわわけたる芭蕉葉の露すふ蝶の翼黄ばめり　久貝正典　二二六
106 ながめ向かふ心心にかなしさの色定まらぬ秋の夕雲　安藤野雁　二二八
107 江口びと簗うちわたせその簗に鮎のかからば鱠つくらな　與謝野禮嚴　二三〇
108 月清み海上がたの沖つ洲にあさる秋沙の數も見えけり　海上胤平　二三二
109 楡澤をうち越えくればやまとたけるかみのみことの昔しのばゆ　丸山作樂　二三四

⑩ 生れては死ぬ理(ことわり)を示すちふ沙羅(さら)の木の花美しきかも　天田愚庵　二三六
⑪ 萩寺の萩はおもしろ露の身のおくつきどころここと定めむ　落合直文　二三八
⑫ 處女はげにきよらなるものまだ售(う)れぬ荒物店の箒(はき)のごとく　森鷗外　二四〇

跋　韻文の魂　二四三

序

砂中の金・雨夜の星

記紀歌謠から萬葉、二十一代集を經て近代短歌に到る和歌史展望、名歌拔粹の書は、既に幾度か、幾多の實作者、批評家によつて編まれ、世の人人に迎へられて來た。さすが國風、幾度選び直され、角度を變へて編み改められても、その都度、はつとするやうな新しい發見があり、その重み、厚み、深みは量り知れぬものがある。多分百人の編者、撰者が、おのがじし、選びかつ編むならば、百種の傑れたアンソロジーが誕生することだらう。

かく思ひつつ、私自身も既に一度『王朝百首』と題して上限を九世紀の在原業平に、下限を十三世紀の順德院に絞つて、すなはち敕撰集の上では古今から新敕撰の九代集にわたる期間の作家九十四人歌百首を選び、心の趣くままに鑑賞して一卷を成した。この百首の中には傳定家撰百人一首の歌人五十四人を採り、彼が敢へて逸した四十人を特に選び入れた。撰歌も前者五十四首は、十三世紀當時に於て、當然それこそ各歌人の代表作、一代の絕唱と思はれるものをのみ提示した。言はばあまりにも有名で、しかも眞の秀歌に乏しい小倉百人一首を修正改撰するのが私の意圖であつた。從つて百首悉皆眷戀の歌のみ、小倉

版に當然入つて然るべしと、十中八九の頷くであらう齋宮女御徽子、賴政、小侍從、宮內卿、俊成女等をも撰入し、私の存念はおほよそ果せたつもりである。それから約五年の星霜を閱した。次に果すべきは『王朝百首』に先立つ時代の作、これに續く近世の詞華の發掘と顯彰であつた。

萬葉以前の詞華を探ることは比較的易い。人麿、家持、赤人、旅人と列記して行つても、たちどころに二十人や三十人は數へ得る。それはまたおのづから別の編輯方法で、異つた趣の萬葉中心のアンソロジーを編むべきであらう。私はむしろ、從來歌の衰頽期、暗黑時代と見做し、鑑賞をためらひ續けて來た十三世期後半から十九世紀に渡る夥しい歌群の中から、八代集和歌黃金時代の絕唱と比較し得る作を撰出することに努力を傾注した。衰微退潮と一口に言ひつつも、玉葉、風雅には逸すべからざる佳品が決して少くはない。二歌集を除く續後撰から新續古今までの十歌集から、砂漠の中に砂金でも拾ふやうな思ひで秀作を尋ね廻るのも、一種自虐的な樂しみだつたと言へる。砂漠にも金はあり雨夜にも星は見えた。連歌俳諧全盛の十四世紀から十六世紀を、俳諧師の和歌

作品をも選び入れつつ近世へ下る道程は、おほよそそのやうな焦燥と諦觀がつきまとひ續けた。以後幕末までの行路は言ふも更なり、輩出する高名な國學者の眼高手低の凡作中から水準作を選び、その中から佳品を抽出する作業は相當な精神勞働である。和歌はほんの一握りの先覺者を岸に遺して、細りつつ、濁りつつ明治に流れ入る。そして「明星」と「根岸短歌會」によつて、實質的な革新の機運の盛上る直前で、この詞華集の時期は切上げた。兩派の切磋琢磨を希つて觀潮樓歌會を開く先覺者、前人未踏の文學領域に挑戰した超人森鷗外の一首を以て閉ぢたのは、この後の歷史こそ初めて現代短歌に直結するものであり、卷を改めるべきであると考へたからである。

與謝野寛を卷頭とするささやかな詞華集は、本著にやや先んじて取敢へず五十首を選び、同時代の俳諧五十句を併せ、『秀吟百趣』（每日新聞社）とタイトルして世に問うた。『珠玉百歌仙』『王朝百首』（文化出版局）『秀吟百趣』三者を通覽するなら六五〇年生れの齊明天皇から、一九三八年生れの佐佐木幸綱まで、ほぼ十三世紀にわたる日本の代表歌人の、記憶に價し愛誦に耐へる作品が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.